

## 多様な見方を促す～当事者の声を聞く～

話題提供者: 清水 奈名子 (宇都宮大学国際学部准教授)

日時: 平成27年12月18日(金) 9:00～10:10

会場: ラーニング・コモンズ4

### 原発避難者証言集を用いた授業実践

第10回のUdai教育セミナーでは、国際学部国際社会学科の清水奈名子准教授から、多様な見方を促すための工夫について、基盤教育科目「3.11と学問の不確かさ」における実践を中心に報告いただきました。特に栃木県内で生活を続ける福島県からの避難者から聞き取った内容を記録化した『証言集』を読むことが、どのような学修を呼び起こすのかが注目されます。

### 「原発避難者証言集」の作成

「3.11と学問の不確かさ」は、清水先生を含む、4学部8名の教員とゲストスピーカーで行われるオムニバス形式の授業です。清水先生のご担当回では、原発避難者の証言集が教材として用いられます。これは、福島県から栃木県内に避難されている「栃木避難者母の会」と国際学部附属多文化共生圏センター福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクトによる編集委員会が制作(H26地域志向教育研究支援事業)したものです。聞き取りの対象者12名中9名は女性ですが、それは表面化しにくい女性の声を意図的に採り入れようとしたためです。その際、「事故前の福島での暮らしはどうであったか」を起点に聞き取りを始めることで、「避難によって失われたもの」が浮きぼりになりました。

証言集の作成がなければ表出できない「語り」を記録したいとの思いがこめられましたが、実際には自身の語りを公にすることをためらい、発言の記録からの削除を申し出たり、「非公開(教材としてのみ使用)」を希望するケースが多かったそうです。



その背景には、聞き取り対象者が思い出すことがつらい体験を文字化し、公表することの難しさ、「語り」を理解するための前提となる情報の獲得と理解、つらい聞き取り内容を文字として再現する側の心理的負担等が課題となります。前回のセミナーでは、フィールド・ワークによる現実体験をアクティブ・ラーニングに活かす意義を捉えましたが、このような衝撃が大きい現実を題材とする場合には、アクティブ・ラーニングにおいて、単純に、現実を学修の場に持ち出すことが正しいとは限らないことを物語っています。



## 教材としての「証言集」の意義

この授業では、こうして作成された証言集の内容を読み、感想を言語化し、発表することで、受講者間での共有と理解を深めようとしています。この授業を経て、学生が受け身ではなく、主体的に原発避難問題を捉えるようになります。一方、この問題への興味・関心の薄れも感じられるそうです。この問題は、証言集を教材として使うということの意義とも関わるように思います。今の一年生は東日本大震災が起きた当時は中学生であり、自分の問題として震災を捉えていた震災直後の入学者とは、発生時の受け止め方が異なります。このズレが埋まることはなく、時間の経過に伴い、一層隔たりが大きくなります。事実を記録した証言集の受け止め方にも生々しさが薄れ、「歴史資料」に近いアプローチになっていくことでしょう。時間と共に教材としての「証言集」の意味づけも変わらざるを得ません。これに応えるものは、当事者の実体験しかないと思います。このケースでは、「記録」できなかつた「語り」の意義を伝えることが、「3.11の歴史化」を食い止める手段ではないかと思われます。

清水先生は、いま現実に動いている社会の問題を捉えて授業を設計することの難しさを感じつつも、受講生には、絶対に正しいものはなく、多様な現実、価値の中から、自分が選択し、その選択に対し、民主的方法で他者の理解と共感を得る力を養おうと実践を重ねていらっしゃいます。

## アクティブ・ラーニングの課題

アクティブ・ラーニングの授業設計は、学生の履修年次や科目の位置づけによって、採り入れ方が異なります。清水先生は、多様な実践の中で、学生自身の「なぜ」という疑問をいかにして引き出すか、それを教員が誘導するのではなく、学生自身が見つかるために、答えのない問いと対話形式による展開を心がけています。

アクティブ・ラーニング実践上の課題としては、同手法を導入する割合に比例して、学生に伝える学習情報量が減少するという問題が挙げられました。専門教育においては学習情報量にも配慮する必要があります。歴史的・構造的把握が求められる内容に関しては、講義中心の授業設計となります。ただ従来は教員が学期末に授業のまとめを講義形式で行っていましたが、中間と最終の振り返りの場面で、「ペアワーク・ディスカッション」を採り入れて、学生自身による取りまとめの場面を設けたことで、知識の定着と学習の動機付けが図られるようになったそうです。

またアクティブ・ラーニングに必要なスキルが高校までの教育で身につけているのかどうか、さらにアクティブ・ラーニングで習得した自律的且つ批判的思考力が、卒業後に職場等で果たして評価されるのかどうかについても、活発な議論が行われました。